

オープンカレッジ ・ パネルディスカッション

「女性起業家に学ぶ 街おこし・村おこし・自分おこし」

今、地域づくりに貢献する女性達が輝いている。光を放ち続ける女性たちの起業事例を語っていただき、女性の自己表現の方法、その過程における問題点、現状の課題等を見つめ直し、共生の社会における女性による『街おこし・村おこし・自分おこし』を参加者全員で考えてみたい。

コーディネーター：松本大学地域総合研究センター研究員 今井 朗子氏

コメンテーター：長野県監査委員 女性議員をふやすネットワーク『しなの』会長 樽川 通子氏

パネラー：ブルーベリーフィールズ紀伊國屋代表 岩田 康子氏

—— 30代の自分探し、ブルーベリーとの出会い ——

：明宝レディース社長 本川 栄子氏

—— 女性による村おこし、規格外品トマトの活用法 ——

：岡谷市中央通りおかみさん会会長 矢崎 京子氏

—— “笑顔でおもてなし” 商店街の活性化への挑戦 ——

平成16年 8月10日（火）

松本大学 5号館にて実施

はじめに

今井／みなさん、こんにちは。本日はお暑いところ、お集まりいただきありがとうございます。ただ今から、パネルディスカッションをはじめます。

まず中野和朗松本大学学長から、ご挨拶を申し上げます。

学長／みなさんこんにちは。

ようこそ松本大学へ。心から歓迎を申し上げます。松本大学は、“地域立大学”ということ、自他共に認めているところです。地域に何らかの形で貢献できることは、何でもトライしようということでやっています。今日の「女性起業家に学ぶ街おこし・村おこし・自分おこし」は、昨年文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されました松本大学松商短期大学部の「多チャンネルを通して培う地域社会との連携」プロジェクトの一環として位置づけてやらせていただいています。

今日は女性起業家ということで、各の地域のとても元気のいい女性の皆さんが、街づくりに貢献していらっしゃるお話を聞くわけですが、どこの家庭もそうですが、女性が元気な家庭は、たいへん活気があって幸せと相場は決まっています。これは家庭だけではなく、社会もそうです。女性が元気なところは大変幸せな地域社会になっていると思います。

実は、手前味噌ですが、今日はここに地元の新村の方もいらっしゃっていると思いますが、新村というところはお婦人のみなさんがとても元気がよいところです。この間、新村の「夏の音楽祭」が松本大学で開かれました。感動で圧倒されたお祭りでした。女性の皆さんが縁の下で力持ちでやってくれました。このお祭りの素晴らしい成果は、女性の皆さんのエネルギーの賜物と思っています。

松本大学も地域の婦人の皆さんに大いに期待しています。「幸せな地域づくりへの貢献」という松本大学の“志”への協働をこれからもよろしくお願いします。お願いを申し上げてご挨拶とします。

今井／改めまして、みなさんこんにちは。私は本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます今井朗子でございます。今日はすばらしいパネラーの方々と、ベテランのコメンテーターをお招きし、そして目を輝かせておいでいただきました皆さん方を前にしてたいへん緊張していますが、何とか勤めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

今日のパネルディスカッションですが、農業とか商業の各分野で活躍されている方からご体験や実例をご紹介いただいて、起業を通じて、女性がいかに自己実現できるかをみんなで考えたいと思います。それとともに、そのプロセスにおける問題点とか、困難を乗り越えていく具体的な方策や知恵を話し合ってください。そしてそれによって、起業されている方やこれから起業しようという方が元気になるほしいと、こんな考え方でパネルディスカッションを組ませていただきました。



子供とともに生きるために ― 初めての農業・ブルーベリーとの出会い ―

では、パネラーの方のお話をうかがいます。最初にブルーベリーフィールズ紀伊國屋代表の岩田康子さんをご紹介します。

岩田さんは35歳のときにお子さんとご自分と3人で琵琶湖を見下ろす丘の上にお移りになり、ブルーベリーの栽培、これは今まで農業経験を全くお持ちにならないのですが、土と関わりたいということで、ブルーベリーの栽培を始められました。若いお母さんが子ども2人を抱えてのお仕事は、数え切れないほどの困難な問題がありましたが、それをクリアされて現在があります。

現在はブルーベリージャム、その他の幾種類かのジャムを作るジャム工房とか、自家製天然酵母で作るパン工房、それにレストラン、ハーブガーデンなどを経営されています。日本ブルーベリー協会の副会長もされておられ、ご本も書かれておりまして『ブルーベリーの実る丘から』『ブルーベリーの畑から』など、いくつかの本を書かれています。そういった積極的なお母さんであり、起業家であり経営者でいらっしゃいます。では岩田さんお願いいたします。

岩田／みなさん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきましたように、「35歳から子どもをつれて」と、一つちょっと抜けているところがあるのですが、実は離婚いたしました。それからの仕事でした。それまでは京都で生まれ、京都で育ち、農業ということに対しましては、消費者という立場か

らお金を出して、商品としての野菜、お米を買うという専業主婦の立場でございました。

35歳で離婚になったとき、キャリアのない私がお金をどう生きていくのかと思いました。当然お金の収入が要る。だから働かなくてはならない。子どもを食べさせていかなければならない。ただ食べさせるだけでなく、子どもを育てるということに対して、どうしたら自分がちゃんとしたことがしていけるかというとき、たとえば離婚なんかないほうがよいし、そんな切羽詰ったときに立たされるというのはないほうがよいだろうと思います。

けれども、そういう場に立ってはじめて、私は今そのときを生きていて、ちょうど35歳はアクティブに生きる最中で、平均年齢が80何歳といいますから、35歳はほぼ折り返し地点。その後半の人生をどう生きるかを本当に考えました。

生きるというのは、私たちはお母さんのおなかから「おぎゃあ」と誕生しますが、すでにおなかの中から生きているわけです。いま自分が毎日を、この日々を生きている。しかし、そういう思いを持って生きているんだと感じられる瞬間はあまりなくて、日々を「今日は腹が立つことがあった」「今日は不満だった」「今日は何か楽しかった」と、その日その日を暮らしていく。そういう中で、離婚があったとき、はじめて生きている今、これからの後半の人生を生きた、生きるということはどういうことなんだろう。子どもを育てるということはどういうことなんだろうということを考えました。私が引き取るようになった子どもを、ただ単に自分の手元に置くだけではなくて、ちゃんと育てていくということの中で、私が選ぶ職業というものが、子どもを育てることに、そして私自身の人生、人生は「人が生きる」と書きますが、そのものになっていくのではないかと感じました。

ですから専業主婦でその立場から何ができるのかと思ったとき、一般的に言えば途方にくれる思いで、日々新聞の求人記事を見たり、雲をつかむような気持ちで、どうして行こうか、何をしようか、どんな仕事につくのか、また、反対につけるのか。35歳でしたから、ちょうど年齢制限で自分の思っていることができないというときにたまたまご紹介いただきました、滋賀県の琵琶湖を見下ろす山の棚田の一角が売りに出されていたんです。そこに別に親戚縁者があったわけではなく、京都で生きているその場所に、偶然得た「そういうところが売りに出ているよ」という一つの情報でした。それがまたなんとなく、いってみようかなと行きましたら、すばらしい景色だったんです。

ここにも諏訪湖がありますから、眼下に一面に広がる湖の景色というのをご覧になったことがあるでしょうけれども、私のところは棚田があって、松林があって、その向こうに広がる湖、比叡山からのやわらかい山並み、そんなところの景色を見たとき、なぜか日本離れした、スイスのジュネーヴのレマン湖の光や風を感じて、この景色の中だったら生きていけると直感的に思ったんです。生きていけるというのは、例えば生きていくにはお金の支えが必要だったり、親とか兄弟とか友人の支えが必要だったり、何か支えがあって生きていけると思うのですが、その場所は、棚田で道がありました。電話線、電気が来ていましたが、水道はありませんでした。でも山の一番水がいただけたと思いました。あとは、プロパンガスを運んでもらって、家があれば生きていけると思いました。

そして土の中で暮らしたいというのは、子どもを育てるときに、親がどんな仕事をしているのかというとき、私が土を耕して、一粒の種が落ちて、芽が出て、その花が咲いてその実をいただくということに関わりながら生きていくことを、もし子どもが見ていたら、ひょっとしたらそれ以上に子どもに伝えられることはないんじゃないかな。子どもと向き合うのではなく、私は土と関わる。そして命を育てるということをする、そのことをしていくこと以上に何が伝えられるだろうか。というのは、それまで専業主婦で母親でしたから、ピアノのお稽古に連れて行ったりしても、子どもは思うようにレッスンもしないし、「もっとこうしたら、きっとこうなる」と親は思っているの



すが、思い通りに行かないものでした。子どもは子どもの人格があって、思うとおりに行かない。向き合っていてだめだと思ったんです。でもそのときすぐに農業がすばらしいと思ったわけではないんです。その場に立ったときに、「あっ農業を暮らしとして生きていこう」。ひょっとしたら、それが一番子どもに伝えられることではないかと思えたんです。だから私は農業はすばらしいことのように、本当は大変なことなんです、そこでふと、ブルーベリーはどうかしらと思いました。

20年前に「ブルーベリーはどうかしら」とどうして思ったのかと。長野県ではブルーベリーはメジャーですが、それでも20年前はまだまだ盛んではなかった。そのときに近畿圏のこんなところでどうしてブルーベリーのことを知っていたのときかれることがあります。

私はお料理が好きで、フランス料理を習っていました。そのときにある先生がデザートを作るときにアメリカのシロップ漬けのものを使いながら、それはインク色をしているんです。水煮でぶよぶよしていて、甘いともすっぱいともおいしいとも思えないものを使って、「本当は生のブルーベリーだったらとってもおいしいですよ。」とおっしゃっていました。その言葉が憧れなんです。見たことも聞いたことも食べこともない、どこに行ったら手に入るのかもわからないものへの憧れをそのときはインプットされたと思います。どんなものだろう。すてきなんだろうなぁ。いつか食べたいなぁと胸の奥にきつと大切にしまわれていたものが、なぜかその場所、ヨーロッパ風のその場所に立って、ふと「ブルーベリーはどうだろうか」と思わせたんです。すごく調べてこれからはブルーベリーの時代がいつか来るからとか、そういうことは何も知らず、ふと思ったのです。インターネットがなかった時代なので、まず本屋さんに行きました。大きな本屋さんには専門書の書棚あって、見たら一冊の本があったんです。東京農工大の市川先生が書かれた『ブルーベリーの栽培の仕方』という本です。その先生も恩師に、「日本に入ってきて20年もたっているブルーベリーについて1冊にまとめなさい。大学が研究してきたものをまとめなさい。」といわれ、その春に出版された本がそこにあった。

この先生のご都合で、半年、1年出版が遅れていたら、私は本屋さんに行ってもその本にも出会えなかったんです。きっと「縁」とか「タイミング」とか「チャンス」とか、いろいろな言葉があるけれど、きっと誰の周りにもそういうものがあるんだけど、私はすごいタイミングで、ご縁があったんですね。ブルーベリーを栽培するというのに。

そして、1冊の本をむさばるように読みました。でもそのとき、それはかなりの専門書でしたから、小学校の子どもがおにいちゃんの中学生の本を読んでいるようで、拾い読みしかできませんでした。いわゆる学術ものを読むほどに農業を知らなかったもので、そこから唯一読み取ったのは、ブルーベリーは木のものだということ。つるのものでも草のものでもなくて、1回植えればどんどん大きくなっていき、年に1回の収穫で、5年6年もたてば1トンも取れる。1トンなんて想像もつかない。すごい量。たくさん取れるのだなと。それだったら、私も、生業に経済的に収入を得て生きていけるのではないかという、単なる思い込みでした。

それで始めたのが今のブルーベリー園につながっていくのです。

おかげさまで、たいへんな人気がございます。私は自分のブルーベリー園に一度も除草剤をまいたことがない。一度も農薬をまいたことがない。なぜならば、それまで消費者として、その頃、少しずつ農薬の話が出ていた時代に、「そんなのないほうが良いね」と消費者の立場で思っていたのに、立場が代わって生産者になったらそれをジャージャーまくような人間にはなりたくないと思っただけのことです。いつかJASとか認定が取れるとか、まだJASの「ジャ」もない時代ですから。ただ人として立場が変わったら、ぜんぜん違うことをするような人間にはなりたくないと思って、草ぼうぼうの中で、こんなに小さな苗木を育てて、今ではこんな背を越すほど大きくなってたわわに実をつけてくれています。そういう除草剤も農薬も一度もまいたことがないというところで、ぜひ摘んでみたいと、長野県のようにブルーベリーはたくさん栽培されておりませんから、非常にたくさんの人に来ていただけるようになりました。

起業をしようとか、いつかレストランを大きく立てて、儲けようと思ったわけではありません。本当に小学生の子どもとともに生きる。子どもを育てながら私自身が生きるために農業というのは、私がブルーベリーを育てるように反対に私自身が育てられた。土に汗して、その中でいっぱい向き合う。その中で初めて地球の上に生きる自分を教えてもらった。そんなところが私のスタートです。では、つぎの方のお時間がありますので、次の方をお願いします。

女性グループの地域農業起こし

今井／一応時間をお願いしたものですから、お話はまだまだ中途のような感じをお受けになる方もおられそうですが、またあとでお話をうかがう時間がございますので、次の本川さんをお願いすることにいたします。

岐阜県郡上市株式会社明宝レディース社長の本川栄子さんをお願いいたします。昭和50年に、当時は郡上郡明宝村でした、村の女性グループで料理勉強会を持ったことに始まりましてトマトの規格外の有効利用のためにトマトケチャップ作りとか、さらには郷土食の製造販売など、いろいろな活動にチャレンジしてこられました。平成4年に農業婦人グループと一緒に株式会社明宝レディースを設立されまして、その翌年に本川さんが代表取締役社長に就任されました。

昨年の9月には総理大臣の官邸で政府主催の『地域農業起こしに燃える人の会』というのがございまして33人の会員だそうですが、そのお一人に選ばれたり、非常に活躍されておられます。

では、本川さんをお願いします。

本川／みなさんこんにち。ごめんなさい風邪を引いて、お聞き苦しいかもしれませんが、お許してください。

ご紹介いただきました何十年前は「レディース」ですが、何十年かたちますと「おばさん」でございます。それでも「レディース」という名前を頂きまして、毎日元気で働いています。私も社長になっていますが、社長ではございません。ほんに平でございます。私は早くから行って、ケチャップを煮ながらみんなが来るのを待つということです。そういうことを何年も続けています。それは私たちがそういうことをしているということ、これからの後継者の方にも見ていただきたいと思います。姿を見てくださいといっています。

私たちがグループを始めたのは、50年です。本当に多角経営です。24名の女性です。生活改善グループのときは、スキー場に行って雪が降ると、「金が振ってきた」と喜んで、そのときはすごく儲かりました。足で踏むくらい儲かったんです。今は罰が当たったのではないかと思うが、今はスキーをなさる方が少なくなりまして、ごみだけをいただいているわけでございます。そのときは本当にたくさんの売り上げがございました。

その売り上げをみんなで分けるわけにはいかない。何とかしてみんなに分けてそれを村に寄付をした。寄付させていただいて、私たちは生活改善グループでがんばっていました。明宝村には第3セクターの会社が5つございます。村長が、「5つめの会社はなんとしても女性の会社がよい。つぶれてもよいのでなんでもやれ。」ということでございました。

やはり、家庭の主婦でございます。株式会社なんて頭にもありません。どうしたらよいか。とにかく旦那さんたちを呼んだんです。旦那さんに許可を得てはじめたんです。おかげさまで、今となっては本当に皆さん働くところもあって、良かったと思います。

以前は「うちのおっかあを、何時まで使うんだ」としられました。何とか旦那の機嫌をとらないといけないと、毎年一回ずつ感謝祭をしています。そうすると「うちのおっかあをどうぞよろし



ゅう頼みます」と、旦那さんたちは前向きになって、洗濯物を取り込んだり、お勝手に行ったり、いい旦那さんになりました。そうすると、「うちのおかあちゃん、ほら車こっち、どうかな」と、すぐにいって、家に帰ると女性の方は社長でございます。

お金もどれだけの利益があるので、旦那さんたちが上手に使っていると思います。最近では出会うと旦那さんも本当にニコニコして、「うちのおっかあをどうか、いつまでも長くお願いします。」となります。それはそれで、仕事がないとだめ、利益がないとだめということです。それを何とか利用したらというのではじめてのがトマトケチャップです。

家庭で作ってみて、こういう味ならおいしいのでということで、現在のケチャップ味にするのに6年かかりました。今は規格外をこちらへ頂いて、本当にたくさんいただいて、それは腐らせるのはもったいないということで、今は10人くらいのパートをお願いして、一生懸命、製品にならない場合は冷凍しておきます。冷凍保存して出なくなったら使います。みんな一生懸命やっています。釜は4つです。中は40℃くらいでございます。

本当によく売れます。これはマスコミの力です。テレビ。こちらからお願いしたことはありません。また12日に入ります。この間は9日に名古屋テレビが入りました。今度は東海テレビです。こちらからお願いしたことはありません。

皆さんが「どうしたらああいう人が来るのかね。」と聞きますが、「やはり良い物を作ってください。」「自信のあるものを作ってください。」と皆さんとお話します。とにかくうちは手作りでございます。年間23万本を作ります。それでトマトが郡上だけでは間に合わなくて、飛騨のほうから、年間150トンのお願いをしてきました。それでも1日おきぐらいに大きなトラックを借りて、持ちに行っていていただいております。

やはり、みなさんが今は30代からです。その方々にお仕事があります。「お仕事があるからうれしい。」といってもらえます。私たちは機械化していません。機械化をすると皆さんの雇用の場がなくなってしまいます。うちは12月から3月にスキー場でお店を出しています。その下に下りますと、レストランを温泉の中に経営しております。そしてまた、デイサービスの食事です。私たちの会社で仕出しもやっています。弁当もやっています。それからお豆腐もやっています。

本当に多くの方に視察も来ていただきますけれども、前は小さなところでした。はずかしいくらいでした。村に「なんとかして」とお願いしましたら、今度はりっぱものを建てていただきまして、私たちは使用料を払っています。一日に2500円会社。温泉は一日15000円です。使用料を払ってやっていますから、使用料がいりますから、何とかしてみんな元気で働いてください。食材は地元のものを使うことにしています。農家の方が買ってくれとってきたら、みんな買ってあげます。今はナスが取れるでしょう。うちは日曜日にバイキングをやっています。そうするとたくさんの量が出ますので、ナスなんか、どえりゃーこともらっても、でるわけです。かぼちゃでもそうです。農家の方は捨てるものが何もないといっています。

計画栽培をしています。カブも4月に農家の方によっていただいて、「あんたのところはどれだけできますか。」と聞いて、そこで機嫌をとるんです。温泉に連れて行って、いっぱい飲んで、お弁当を出して、お土産もって、「たくさん作ってください。」という、また元気がでて、「もういい加減に種はこんな。」といってやってくれます。

そして、『なんばん』なんかは私たちが作りまして、農家の契約の方に配ります。そうすると、わたしたちはいそがしいので、はっぱだけとって、それはシルバーをお願いしています。明宝の方は休むことがないと思います。年配の方でもトマトの整理をお願いしていますからね。女性は、やる気と勇気と元気があればなんでもできるとみなさんと話をしています。

私はボーナスを2回出して、5月決算をするので決算手当を出します。毎年村には、400万円くらい寄付していたんです。「まだまだこんなにいい会社はない。」「子どもさんが小さい方、お年寄りのある方は、さらに大事にしてください。」ということで、すると皆さんが喜んでがんばって

くれます。

ただ、従業員の方を使うばかりではだめです。私たちは香港旅行にも行きました。いっぱい飲まないかといって、皆さんを元気付けてやっています。おかげさまで、売れて売れてという感じです。注文も入ります。宅配でも出します。三越さんや高島屋さん、名鉄百貨店など、大きなところにも使っていただいています。

従業員の方には絶対に会社のものを使ってください。そうすると、もらったりおいしかったりで、そういう感じにしています。「法事があったら絶対に使ってよ。」とっています。イベントのあるところはどこでも行きます。皆さんに味を見ていただいて、輪を広げるということで東京でも行きます。

第3セクターの方がやはり連携していろいろなところに持って行っていただいております。年間23万本作っています。それだけ作っても在庫はないほどになります。3月頃終わることがありますが、そのときはそこからも注文をとります。「できましたらすぐに送ります。」と絶対お客さんを逃がさないことにしています。

なんとかして、温泉に来ていただいたお客様には、ここでしか食べられないものを作らなければと、今も一生懸命、女性が強いです。機械はみんな女性が使っています。男性は一人もおりません。「男性はどうですか。」「要りません。」と、みんな女性で頑張っています。

若い方も機械も使います。それでみんなでわいわい言いながら、本当に楽しくやっています。「女性だから、難しいでしょ。」といわれますが、それでも私の言うことは何でも聞いてくれます。「はいはい」と聞いてくれます。私も最近は強くなりました。皆さんには、情報を常にいろいろ物事を言わなければならない。怒るだけではだめです。「どうですか。」とやさしい言葉でいうと、「そうですね、」と相手の方も怒っていても笑って言ってくれます。人を使うということは大変ですが、楽しみもあります。これからは後継者の方が立派にやってくれると思います。その姿を見ながらやっています。

今井／ありがとうございました。

岡谷市中央通り おかみさん会

では、岡谷市の中央通りおかみさん会会長の矢崎京子さんをご紹介します。大学卒業後、ふるさとの岡谷に帰ってこられまして、サンリオとの契約による「ファンシーショップ・カネイチ」（キティちゃんのお店）を23歳の若さで始められました。長野県下第一号店ということです。お店は現在までずっと、にぎわっていますが、開店当時にぎわっていた中央通り、ここは岡谷で一番メインの場所ですが、その中央通りが少しずつ沈黙化してきているということで、この街を元のように、いえ、それ以上に活気のあるものにしたいというところから、おかみさん会を組織して、力を合わせて街の活性化に取り組んでいる現状です。

それでは、矢崎さん、お願いいたします。

矢崎／ご紹介預かりました、矢崎です。今、ご紹介にありましたように、岡谷の中央通りというところで、まだ4年前ですが、おかみさん会を立ち上げました。

どうして「おかみさん会」を中央通りで立ち上げたかということからお話します。

こちらに来てくださっている方は、岡谷のことをご存じないと思いますので、説明します。岡谷はむかしは製糸の町でした。女工さんがたくさん



いて、特に中央通りという私がお店をやっている通りは、今で言う原宿の竹下通りを想像してもらえばわかりますが、それぐらいのにぎわいだったと私の父や母から聞いています。私はその時代、戦前はまだ生まれていませんので。その時代はすごかったという話です。

私が23歳で大学から戻り、サンリオ、キティちゃんのお店、知っている方は若い方だけかもしれませんが、店を始めたときも中央通りはにぎわっていました。お店を始めて、10年くらいたったとき、イトーヨーカドーさんが駅前に出店しました。それから5年くらいでしたか、アピタさん、ユニーさんですね。中央通りは1丁目から5、6、7丁目までまっすぐの道なんですけど、1丁目の駅の入り口のところにイトーヨーカドーさんが出店なさり、7丁目の中央通りの上のところにアピタさんが出店して、それでもなんとか、そこそこにはやってきていました。一番決定的だったのは、5年くらい、もっと前でしたか。まっすぐだった中央通りの真ん中をふさぐ形で長野東急さんの系列で岡谷東急さんができました。それがどうしてそんなことになったのか、私はいまだに理解できませんが、まっすぐだった道路をふさぐ形でできました。それで1丁目、2丁目というのが、東急さんと呼ぶために3mずつ道路を拡張しまして、全部お店がきれいになりまして、それで東急さんと呼んで、3丁目をつぶして東急ができました。

私が中央通りといっているのは、4丁目から上、5、6、7丁目。それが中央通りとして残っています。その中央通りをふさいで作った東急さんが4年間ほどで撤退なさいました。それよりも少し前に駅前にありましたイトーヨーカドーさんも撤退なさいました。そしてあとに何が残ったとかいうと、シャッターだらけのシャッターが下りた中央通りが残ったわけです。

そんなときに私は中央通りにずっと育ってきましたし、そこで店もやらせていただいていたんですが、本当に人通りがないんです。で、裏通りというか、東急さんが、今はあとは市が買い上げて『イルフプラザ』という名前前で営業していますが、もうその前の通りが広いくらいで、中央通りは裏通りというか、なくてもよい通りという感じの通りになった。そんな感じを受ける通りになりました。そこでみんなやる気をなくしていました。もう「どうせだめだ」という感じです。若い方の中には、「中央通り」という名前すら判らない子もいるくらいです。

これは困ったことだと思ひまして、とにかく何かしなければいけないと思いました。そのときに全国に『おかみさん会』というものが、商業者の方たちで作った会が全国にいろいろあることを知りました。今日は松本の『おかみさん会』の会長さんもおみえになっています。そういう方たちのことも頭の片隅にありました。あとは岡谷の隣の下諏訪町の御田町とうところにあったり、諏訪市にも駅前にあって朝市などをしていました。岡谷もやるしかないなと思いました。

ところが、私はそう思って、中央通りには女性のいる店50数軒あるのですが、一人だけ燃えて『おかみさん会』というのを作りたいんだけど一緒にやりませんか」というと、「忙しい」とか、「まにあっている」とか、別に何をしてくださいという前からかなり拒否反応がありました。「この人はどうしてこんなに燃えているんだろう。」とそんなふうに言われました。でもとにかく、ここで負けてなるものかと思ひまして、とにかくお店番をしている女性が多いわけで、上諏訪や下諏訪は朝市などをやっていたんですが、そういうことは無理だろうと思ひました。お店にいながらできることなら何とかできませんかと、例えば、のぼり旗を作り、とりあえず月に一度でよいから、『おかみさん会の日』というのを設けて、その日だけののぼり旗を出していただいて、それぞれのお店ごとでワゴンセールでもよいし、スタンプ2倍でもよいし、ラーメン屋さんだったらいつも500円くらいのラーメンを今日は2割引で400円でもよいとか、一品でもよいのでそういうことってできませんかといったら、そういうことならできるかもしれないというお店が40軒ありました。それで、とりあえずのぼり旗を作りました。そして、一店ずつ旗をもって行って、月に一度第2土曜日に出して、その日だけでもよいので、とりあえずやっていただいけませんかといって、やっていきました。

それだけでは寂しいので、立ち上げたのがちょうど2001年1月なんですけど、5月にスプリングフ

ェスティバルを行いました。これはそのときのポスターのゲラですが、岡谷市出身のあらい汎さんというパントマイムの役者さんがいらっやって、その方に「ぜひ街おこしなんでもお願いできませんか。」といったら、快く引き受けていただいて、ピエロのサーカスを中心にしてあとはお祭っぽい雰囲気、ゲーム大会とか金魚すくいとかポップコーンとか、おかみさん会の出られる方をお願いしてやりました。

これだけでやめておけばよかったのですが、さらに8月にアメリカのニューオーリンズのジャズフェスティバルというのもやりました。全国のおかみさん会というのは浅草に会長さんがいらっやるんですが、そのついで、アメリカのニューオーリンズからジャズの人たちが来て、全国をツアーするので岡谷でぜひやりませんかというので、お金も知識も何もなかったんですが、まっやってみるかと思ってやりました。

事実大変でした。カノラホールという良いホールがあるので、こちらでやらさせていただきました。700人くらいの方が来てくださいます、岡谷でこんな田舎でジャズなんかと思ったんですが、評判がよく、よかったです。さらに11月に『主婦の手作り作品展』というのをやりました。

会費も取っていませんし、お金もないので、私たちのおかみさん会というのは手作りが得意な方がいるので、そういうものを作って多少でも売ってお金にしようと思いました。私たちの作品だけでは、たくさん集まらないので、広く一般から主婦の手作り品を募集して、販売しました。

1年間そんなことをして1年が終わり、2年目も、同じようなことをやりまして、更に加えて子どもさんが完全週5日制になりましたので、中央通りでフリーマーケットをやらせてあげたいと小中学生を中心に自分の売りたいものを持ってきて、売らせてあげよう。商売の楽しさ、難しさ、お金の大切さなどを学んでもらいながら、とにかく中央通りをにぎやかくしてもらえればと思ひまして、始めまして、これがずっと続いていてもう15回です。冬場はお休みしています。4月から10月の間の毎月第2土曜日にやっています。今度8月の14日が16回目です。たくさん子どもさんたちが楽しみに来てくれますし、何より日頃閑散としている中央通りに子どもさんたちの声が響き、にぎやかなことは、とてもうれしいことと思います。

そんなことをやって4年目になります。イベントをすると、確かにお客さんは来てくださいます。マスコミさんも本当に力を貸してくださいます、そのつど記事にしてくれるので、私は『中央通り』という文字が新聞に載るだけでうれしいので、本当におかげさまと思っています。でもこのごろ思うのは、イベントだけ、そのときだけ来ただけではだめだと思ひます。月に一度だけ旗を出すだけではちょっと。面倒くさいのか、だんだん旗も出さなくなってしまうと、ちょっと寂しいところもあります。そこで『笑顔でおもてなし』というステッカーを、今年1月に4年目を記念して作りました。結局お店というのは、「一日一日来てくれるお客様を大切にすること」「笑顔でおもてなしを毎日していくこと」の繰り返し、それがそのお店のお得意様を作ることだし、それを全部の店でやっていけば、中央通り全体が「中央通りって、どこに行っても笑顔で迎えてくれて、あったかいね」と思ってもらえたらよいと思ひまして、このステッカーを全部の店に配って店頭貼っていただいて、おかみさん会の会員の方にもちゃんとお客様のほうを向いて「いらっやませ」、何も買っていただけなくても「ありがとうございました。またお越しください。」と言うようにしよう、お願いしまして現在に至っています。

それが基本だと思います。お店というのは、特に小さいお店というのは、物を売るということだけじゃないと思うわけです。コミュニケーションの場であると思います。今は物を買うのは、インターネットでも通販でも買えるかもしれませんが、でもやはりお店に来て、お店の人と話をする楽しみもあると思います。特に女性はどうでも良いような世間話に付き合うのは得意なので。ご主人たちはあまり得意でないかもしれないから、ぜひ私たち女性がそのようにしてご来店くださった方たち一人一人を笑顔でおもてなしすること、それがやはりお店の基本的なことじゃないかと思ひて今それをやっております。

だいたい時間になりました。よろしいですか。以上です。ありがとうございました。

女性達の前向きな生き方

今井／ありがとうございました。

それではコメンテーターの樽川さんから、ご意見を頂きたいと思います。樽川さんをご紹介申し上げます。

長野県婦人教育推進協議会、長野婦人問題研究会の会長をされました。特に昭和58年(1983年)から4期、下諏訪町の町会議員を務められ、この間に副議長もされました。女性が町議会の副議長をされたのは県下で初めてでございました。その他、下諏訪町連合婦人会長、公民館の運営審議会会長、また町の区の区長をされたり、いろいろと公の場で活躍されましたが、現在は長野県監査委員、長野県情報公開審査会委員、長野県個人情報保護審査会委員、更に皆さんご存知の方も多いかと思いますが、女性議員をふやすネットワーク『しなの』会長、このほか「女性会議」しもすわの事務局長もされていらっしゃいます。



いろんな大役をもっておられますが、時間を作ってお出かけいただきました。

ではお願いいたします。

樽川／ありがとうございます。ご紹介いただきました樽川でございます。いかがだったでしょうか。

3人の優れた、なんと言おうか、まずはお人柄なのかなという、そんな思いをしながら、3人のそれぞれのお話をうかがうことができました。

まず、岩田さんですが、女性にとって離婚という、最もハードなたいへん辛いことを乗り越えて、「さて、子育てをどうしようか」「これから生きていくのにどうしようか」と思ったとき、こうしたところに着眼して、その発想と、着眼点に敬意を表したわけです。

その取り組みも、自分が子どもを生み育てるなかで、食品の安全を考えれば、まず無農薬のものがほしいじゃないかという中で、世界が注目しているブルーベリーという、そういう新しいものへの取り組みだという、そういう感性に、そうしたものに驚いたり、感動してお話を聞いたわけです。

3人にそれぞれ共通しているのは、人生を常に前向きに歩んでいらっしゃる。そしてきちんと時代を見極めていらっしゃるということでしょうか。トマトと戦った、本川さん。規格外のトマトに目をつけて、そういうものを何とか生かそうということで取り組まれた、そこにも女らしい、慎ましかさと言うか、物を大切にしなければいけないという思いが込められていると思うわけです。この事業をするに当たって、まず地域の中でいろいろな生活改善グループとか、そういう中で取り組み頂いたという経過はあるが、時の村長さんが「今度は女がやってみないか」「女がやるべきだ」といってくださったと言う、それを考えるとき、地域の首長の果たすべき役割、あるいは首長の持っている感性が地域に及ぼす影響が大きいんだと思うとき、それぞれ地域の中で首長を選ぶときにまず「この人で大丈夫か」という選択眼を培うことも大事だと思うわけです。

24名の主婦たちが生き生きとして働いて、今、報酬を得てきちんと納税できる、税金を払うだけの収入を得る。このことは単に地域のみならず、日本全体から考えても、たいへん大きな役割を果たしている。そして地域の雇用促進に大きな力を発揮してきたんだというふうに、これもまた私は感動したところです。

おかみさんの会の矢崎さんは、実は私は隣町なので、たいへん関心を持って聞いていました。矢崎さんのおっしゃるとおり、かつては賑わいの街でございました。いつ行っても人があふれている、

そんな道路の中に、ひとかげがまばらになってしまった。そして、店を閉めてしまう人が非常に多くなった、そんな商店街の中を、何とか活性化したいという熱い思いの中で、取り組まれたということに敬意を表したいと思います。

私は隣であるがゆえに、その現状を見てまいりました。町の開発とか、その取り組み、その根幹にあったのは、所詮は行政の考え方であり、その姿勢にあったと思います。

私どもは常々政治に対して、住民参加をしようじゃないか、あるいは自分の意見を言っていこうじゃないかということをいろいろな立場を通して、発言している私としては、こんな機会にそういうものへも目を通して、政治が及ぼす、あるいは時の権力者が及ぼす影響が、後の世づくりに、街づくりに、地域づくりにどんな影響を及ぼすのかという意味でも考えてみたいと思うわけです。

ともあれ、おかみさんの会として、おかみさんたちの、女たちの力を結集して、女たちの感性を生かして、新しい街づくりをしよう、新しい村おこし、街づくりに取り組もう、それぞれの立場での3人さんに大変感動と、敬意を持ってお話を聞いた次第です。

このあと更にお話を聞きながら、皆様のご意見もお聞きしながら、あるいはお考えなどもお聞きしながら、今日のこの会が、皆様にとっても私自身にとっても実り多いものであるようにと願っている今でございます。以上でございます。

行政のかかわり

今井／はい、ありがとうございました。

それでは、3人からお話を頂き、コメンテーターからも話を頂きましたがもう一度、パネラーのお3人にお話を承りたいと思います。順序は同じく、岩田さんからお願いいたします。

岩田／ただいま樽川さんがおっしゃいましたように、私は新規就農者として京都から滋賀県に入りまして、農業を始めたわけです。今のお言葉に出ましたように行政とのかかわりの中で、私は非常に不満が大きく、新しく農業をしていく中で足を引っ張られることが非常に多く、何一つ手助けをされたということがありません。

よその県に来たから大きな声で言っているわけではありませんが、まず農業者として農地を5反以上取得しなければ、農業者になれないという決まりがございます。私はまったく知りませんでした。でもそれは当然だろうと5反を取得したわけです。今度自分が買った農地に、これから農業していく私と子どもの3人が住まう住まいも建ててはいけません。それは何年間かたたないと、建ててはいけないという決まりがあります。その意味は何ですか。これから農業するのに、人間は衣食住がなければ生きていけないのに、また別のところに家を買いなさいということでしょうか。建ててくれるわけではありません。貸してくれるわけでもありません。「いけない。」といわれるだけです。私は許可なくして、さっさと立ててしまいました。行政の判断を待ってられません。私は死んでしまいます。「はい良いです。」というのを待っていたら、死んでしまいます。そしたら私の人生は農業をして生きていこうと思っているのに、誰が責任を負ってくれるのか。誰も責任を取ってくれません。私は人の土地に建てるわけではないです。人のお金で建てるわけではありません。自分の土地に自分の子どもたちと生きていくささやかな慎ましい家を自分の力で建てました。

建てた大工さんに「建ててはだめ」という、その人たちが建築業者としての許可を取られるんです。何度も赤紙のように紙が貼られ、屋根がかぶったところで、私は出頭いたしました。大工さんがついてきてくださいました。建築指導課というところで、その大工さんは京都の知り合いの方で、建築士に言ってくださいました。「この人はこれから滋賀県で一生懸命に農業をやろうとしています。その人が自分たちの家を建てて何で悪いんですか。僕は行政から僕が罰せられるのなら、僕の

自分の手が後ろに回るつもりで、ここの家を建てました。」とおっしゃいました。指導課の人が引きました。びっくりしました。私はなぜ悪いんですか。なぜきまりがあるんですか。行政の人は答えられないのです。「なんとか県に行ってください。」といわれ、県に行きましたが、県も答えられません。要はそのとき列島改造論があったとき、建売業者がどんどん農地を買い取って建売の家を売っていく。そういうことを、違反をする人を規制するために、本当にやっていこうという人もやはり同じように3年たってからといわれていたわけです。その3年間は何かですか。行政の人が見ていてこの農地で3年もやっていたら、農業者だと見られるからです。その3年間私はどうするんですかと聞いても、何も答えはありません。だから悪いけれど建てさせていただきました。

結局、県まで行きましたが、何も回答はありませんでした。あとでこっそりいわれたのは「岩田さんだけ良いですというわけにはいきません。3年経ったら、もう一度来てくれたら、3年の間はうやむやにしておきます」と。行政ってそんなものです。

これから苦難の道を歩いていくわけです。実際に農業では、なかなか収入は得られないです。1トンてこんなに取れるかなと。なかなかそんな道は遠い。一粒一粒のこんな小さな粒を1トンもとるのは、非常にきびしい。その中で私にできることは、現金収入を得るのは何かと思い、自分で全部料理を作る1日1組のレストラン。これも習っただけで、そんなにお金もらえるかどうかかわからない。でも一歩踏み出さないと私にはできませんと甘えるわけにはいきません。自分が子どもを育てるためには、やはりきちっと現金、お金、収入を得なければならない。できるかどうかかわからないけれど、やってみようとは私は一歩を踏み出したのです。

でもところがそこは市街化調整区域でレストラン業はできないという場所でした。それでも私はずっとやり続けて、途中でやっと人に伝わって、お客さんが来た頃に、放火をされて家を全部失うことになるのですが、それを乗り越えて私は本当に銀行に「山の中の田んぼなんか担保にならない。」といわれながらも、それでも話をしたら、その人が人柄を見込んでくれて、今レストランになっています。写真集がありますので見ていただければ、レストランが建っておりますけれども、そのお金をちゃんとした中央銀行が貸してくれました。それを基本にレストランを営んでいます。

やはりそれが市街化調整地域で営業してはいけないといわれました。でもちょうどその頃、農林水産省が『グリーンツーリズム』という言葉を投稿かけていました。農業がある一つの経済的効果を狙うためには都会と農村が交流しましょう。都会の人たちを農村が迎えましょう。そこで落ちる経済効果というものを見ていきましょう。その中にグリーンツーリズム、レストランというのも農業ですよと。それまでレストランでごはんを出していたら「あんなの農業じゃない。」とすごくいわれました。でも私にとってはこのブルーベリー園を育てていくために、これをずっと手放さないで、農地を切り売りしてもお金は使ってしまうとあつという間です。何百万で売ったお金なんて、使ってしまうとすぐに消えてしまいます。これを続けるために違うところで、いわゆる兼業ですね。違う意味の現金収入を得る。そのために私にできることは、空いている日にお料理を出す。予約のときだけ、料理を作る。それで現金収入を持って、ここをまたやり続ける。

私にとっては農業の延長線だったんです。「あんなことをやっている。」といろんなことを言われてきました。でも今はレストランをしているということが認められました。行政で、朝日新聞社にすっぱ抜かれて、そんなことをしているところがある。建設省はこの1軒のために線引きは変えない。農林水産省はグリーンツーリズムでこういうものを認めていると。さて、農林水産省と建設省とどちらが勝つでしょうか。朝日新聞が取り上げた次の日に黒塗りの車がつきました。大津市から助役さんと建設部長が来ました。

隠せられない。風呂敷で建物を隠せない。もういいです。どうぞ見てください。この通りです。私は農業者がいつまでも生産物をいわゆるサービス部門、誰かの業者に卸すだけの仕事をするだけでなく、私たち農業者が自分たちが汗したものを、ちゃんとした消費者に自分たちの味を知ってもらう場。前にブルーベリー園があってそこに働いている人があって、そこで食べてもらいながら、

そこで農業というものを知ってもらおう場。そういう場を農業者がどうして持つてはいけないのでしょうか。私はこのことは農業にとって、とても大切なことだと思いますと話をしました。

10分くらいいっちゃった助役さんが帰る頃に、「ここは認める方向でいきます。」と答えを頂きました。それからもずいぶん行政の指導のためにお金も時間も費やしましたが、晴れて今、許可を頂いてレストランの営業をしています。

うまく、村長さんがいて「やれよ」と言うてくださればすごくうれしいと思います。私はまた全然違う道でやれることを知ったことは嬉しいですし、またこういうことをいろんな所からやっていただけたら、何かを変えていく、何かを切り開いていく、人にはそれぞれそういうことができることがあるんだなと感じています。

ブルーベリーを売るときに、果実はすぐには売れませんでした。それでジャムを炊き出しました。そのときの値段ですが、これぐらいのビン、250 g 1本1000円いただいています。非常に高いジャムです。趣味だったらあげたいです。「作ったから食べて」と言いたい。でも、これをビジネス、生業にするには、本当にきちっと原価計算、経費、ラベル代、ビン代、光熱費すべてしているわけです。それをきちっと計算し、おまけに利益を考えた値段設定をしないといつかつぶれると思います。だから「1本いくら？」と聞かれたときに「1000円」というのはとっても言い辛かった。その当時から1000円、いまだに1000円で売っていますが、1000円という値段をつけました。そしてちゃんとしたものから利益が出る。趣味じゃない世界から一歩抜け出すには、自分自身にも厳しい決断が必要でした。

それを踏み出しておかげさまで全国の高島屋さんで棚に置かして頂いています。それも同じようにうちから売り込みにいったことはありません。10数年前に高島屋さんのバイヤーの方が来られて「ぜひ卸してくれ。」といわれたのは、当時またホテルオークラとか、伊勢志摩観光ホテルとか大きなところが作られているジャムの中に、「これからは農家が、農業者が誠実に生産した、そういう商品を高島屋も店頭に置いていきたいんだ。」という話を頂いたときに、これは断ってはいけないと思いました。それこそ高島屋さんに置くから、より良いものを作るためにそこも一歩踏み出さないといけないと思って踏み出したことが今につながっています。

今井／ありがとうございました。

では本川さん、お願いいたします。

本川／はい。本当に岩田さんのおっしゃるとおりです。行政は、今日おいでかどうか…。

うちは遠いですがけれども、補助として建てていただきました。どこか具合が悪いので「ちょっと直させて」というと、「監査が入る」とか「何年たたないと直らない」とかそういう感じです。使い勝手が悪くても、補助で建てるんですから、私たちは中に入っているいろいろな言えません。そういうことから、温泉のところの衝立を移動するのに3年かかりました。本当に難しくて、「こんなことなら、自分たちで立てればよかった」とみんなで言っていました。そんなわけには行かないです。「行政のおかげさまで。」とっていました。

そういうことは本当にたいへんでした。私たちは何とかして2つでは釜が足りないんで、この2つを絶対にこれをとらないように、何も動かさないようにやらないかということで、私たちが800万円ほどかかりましたが、行政に頼らずにやりました。

そういうことから、本当に難しいです。私たちは村長さんが「やれ」という時分は、何もわからないまま、やらしてもらいました。今になって、もうちょっと儲かったら、自分たちで立てて…と言っていました。

私の夢がかないまして、今度道の駅に「おかみさん」という店を建てました。12月に。私の夢でした。和食の店というところで毎日やっています。それは、自分たちで建てたのです。どうもこう

もなくやるまいかと、村の建物ですが、使用料を出していやっています。どれだけでも収入があれば、また、豆腐屋のほうも会社に移っていきたいのですが、何とかしてがんばるまいかということです。

本当に夢を持って皆さんと働かないかとお願いしています。みんなが安心して働いていける職場作りです。一人一人が健康で明るい、村づくり。そして3世代が仲良く暮らせる村づくり。それを目標にしまして、活力ある、魅力あるものを、私たちの村に展開していきたいと思っていました。おかげさまで私は夢がかなって、やはり夢を持って働かなければいけないと思ってやっています。

行政の方も合併して市になりましたので、なかなか遠くなりました。私たちは私たちになりにがんばって、「女性だけの力はすごいぞ。」といわせようとやっています。

23万本作りまして、みんな計算が速いです。1本500円なら、どれくらいになる。言われたとおり、原材料も何も入っていない。計算速いです。それなりに昨年は1億7000万くらいです。それほどがんばっています。そうしたことで村でも、元気のある女性の会社ということで喜んでもらっています。

私たちも使用料がなければ楽です。いつもいっていますが、「使用料をなんとか省いてください」と笑っています。それくらいで皆さんが働けるのであり、こういう立派なところを建てていただいて、雇用の場があり、感謝の気持ちでがんばろうといっています。村のほうへも、今度は市になりましたから、市に寄付するとか。いろいろきます。そうしたことで、それだけのことをやらしてもらうのだから、おかげさまでですから、みなさんと、やっぱり女性です、喜んで、がんばって、これから夢を持ってやらないかと。まだ一つ、本当にドカーンと建てたいです。

今井／ありがとうございました。

では矢崎さん、お願いいたします。

矢崎／行政の方に不満が出ているということで、私もついでにと言ってはなんですが。

中央通りという通りがいかに寂しいかということの一つの例として、看板というもの、ここは何通りという看板が一つもないのです。そこで行政にお願いして、ここは『中央通り』とか、しかも、一方通行なんです。ですから途中から入れる道もありますが、地元の人にはわかりますが、子どものフリーマーケットをしたり、スプリングフェスティバルとか、ピエロのサーカスをやっても、岡谷の人だけではないので、市外からいろんな方が来てくださいますが、わからない。電話が来まして、「近くまで来てほしいけれど、そこに行きたいけれど、どうやって行ったらよいかかわからない。」といわれます。みんながわからないような道で商売している私たちは一体なんだろうと思ひまして、市役所の商業課、市長にも言ったことがあります。何とか看板一つでよいので、「ここに行けば『中央通り』とか、ここは『中央通り』とか、そういうものを作っていただけませんか。」とずっとお願いし続けているが、いまだにありません。

では「私たちが作って立てるのならよいですか。」というと、「勝手にやってもらっては困る。」とおっしゃるものですから、結局まだ実現に至っておりません。

それから中央通りが穴ぼこだらけだったんです。お年寄りとか、小さなお子さんが躓いて転んだりするところがあり、カラー舗装のところはがけています。結構ところどころぼこぼこしていました。それも何とかしてもらいたいと思っていました。

そしたら神様のお力か何かわかりませんが、ちょうど店の前で穴に躓いたのか、自転車の高校生が転んだのです。そのとき私はちょうど食事に行っていて、母が店番をしていたときに、表でがしんと大きな音がして見てみたら、高校生が倒れていて、私が食事から帰ったときには高校生はいなかったのですが、ぐしゃっと前が曲がった自転車が置いてあったのです。「自転車だけ置いて帰ったよ。」というので、「大丈夫だったの?」と聞くと、「駅の方に歩いていったから大丈夫だった

のでは。」と言っていました。

私はこんなことをしていたらまたもっと大きな事故が、しかも高校生が倒れたときに後ろから自動車 came といひます。幸い高校生が起き上がるのが早かったので轢かれなかったけれど、「もし、お年寄りでもたまたましていたら、危なかったかも。」と母が言いますので、実は投書をしました。これは今、初めて明かす話なのですが、私の名前で書くとちょっとまずいので、私は現場を見ていませんので、母の名前で投書をしました。

「中央通りでこういうことがありました。高校生が穴に躓いてころんだ。自転車が倒れて、自転車がぐしゃっと曲がって、高校生はどうしたらわからないが駅の方に行きました。今までもお年寄りとか、子どもが穴に躓いています。」と、投書したその日に、市の道路関係だと思ひますがすぐに中央通りを見に来ました。

それで一週間もしないうちに一応臨時的にすべての穴が埋まりました。何かないと行政は動いてくれないですね。たいしたことはなくてよかったですが、そんな状態で、中央通りは穴ぼこだらけでもほっとかれて、私の中では臨時的に埋めただけでは納得できないと思ひていましたが、ようやく道路工事が決まり、4丁目は工事が終わりました。私は5丁目にいますが、5、6、7丁目の工事がこのお盆明けから始まります。ようやく中央通りも安心して歩けるようになります。道路だけはなんとかなると思ひます。

後は、人が安心して歩けるようになったので、たくさんの方に来ていただけるには、どうしたらよいかということ、みんなで考えなければならないと思ひます。

今ひとつPRを忘れていました。岡谷はご存知の通りシルクの町です。「シルクの町」とはいえ、取り立てて、昔はシルクをお蚕様からとったんだといひても、蚕糸博物館があつても、私たちはシルクのものを着ていないし、シルクのことにはわかつていません。たんすにいっぱいシルクの着物とか、帯とかがたぶん眠つていて思ひます。シルクのことをリフォームして、何か作つて岡谷ブランドとして何とか世に出せないかと考えました。でもお金がないので、商工会議所さんと組みまして「シルクリフォーム講座」というのを7月26日から10月まで全7回を開き、11月におかみさん会の作品展をするので、作品を出していただいて、さらに優秀作品には賞も差し上げたいと思ひています。さらにそれで「店をやりたい。」とか、「それを売りたい。」という人が出た場合には、中央通りには閉まっている店がいっぱいありますので、どこでも交渉して安く貸していただいてお店をやつていただいても良いですし、私がお預かりして売つて差し上げてもよいと思ひています。なにかそういうシルクのもので岡谷から何か発信できないかということも考えました。

新聞にたったこれだけですが広告を出しましたところ、定員20名のところ80名以上の応募がございまして、一日中広告を出した日は電話がなりっぱなしでご飯も食べられませんでした。

とりあえず80人も来てしまうと60名もお断りするのはいさなういさななので、2講座にしまして、40人受け入れて、後はキャンセル待ちでお休みの方が出たときに来ていただいて、受講していただくことにして、昨日第2回目8月9日の分が終わりました。

受講生の皆様が暑さにもめげず、元気で来て、いろいろ一生懸命、まだ形にはなつていませんがやつてくださっています。本当にいろいろなシルクのものできてくると良いかなと楽しみにしています。岡谷から「よみがえれシルク 世界に一つだけの手作物品となつて」というキャッチフレーズでやっています。おかみさん会としては、新しい取り組みです。

ここにいらっしゃる方の中で、そういうことに興味があつたり、「私そういうのやつているのよ」という方がいらっしゃれば、またいろいろ教えていただいたり、作品をお寄せいただけるとありがたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

コメンテーターからの発言

今井／ありがとうございました。

それでは、もう一度コメンテーターの樽川さんからご意見を頂きたいと思います。

樽川／まず、岩田さんから、はからずも行政に対する不信感というか、不満の声が沸き起こったわけです。行政というのは、そこに住む人のためにあるんだと。そこに住む人のために行われているのが行政なんだという認識を、国民、県民、市町村民一人一人がしっかりと持ってほしいと、私は常々思っている一人です。行政は行政をする人のためではなく、地域住民のためにやっているのが行政だと、その基本をお互いに忘れてほしくないと思っています。

いずれにしても、岩田さんからは、起業に対する基本的なことをお聞きしたと思っています。まず奉仕活動ではないので、利潤が必要です。長野県でも、村おこし、街おこし、あるいは女の起業家がぞくぞくと名乗りを上げています。そうした人たちにとって、今日の方々の話は大変有効だったと思います。それにしても自立ということがいかに辛く、苦しいのか、それを岩田さんはしっかりと乗り越えたんだと。その意志の強さと行動力に本当にびっくりしました。

しかし、私は先ほどの話を聞いて、行政もさることながら、ここにいた農業委員はどうこれを取り扱ったんだろう。農業委員は何の力にもなってくれなかったのか。長野県で言うと、農業委員に女性が今いっぱいおります。どうぞこれから何か起業を起こそうと、こういう問題になったとき、地元の農業委員の力も借りていくんだというような思いをしっかりと持ってほしいということを感じました。

それから本川さんは人間関係をたいへんうまく上手におやりになっていらっしゃる。そのことは先ほども触れましたが、本川さんのお人柄にもよるのでしょうか、24人という、とにかく女性は難しい部分もあります。それは時に、男性と比較するとどうしても感情的に走る部分もあるのではないかということを思うとき、その辺の人間関係はどうなんだろう。それをスムーズに引っ張っていらっしゃるその指導力に驚かされました。

今、本川さんがそうして地域の女性を束ねて、そして地域の女性たちの雇用の促進と、働くことの喜びを与えているとする。それは、後に続く人のためにとって非常に大きな力を発揮しているし、大きな功績があると、私は他県ながら本当に賛辞を送ったり、期待するところであります。

お二人の話は、長野県のこれから起業しよう、何かしようとする人への大きなメッセージではないかというふうに今日のお話を伺ったわけであります。

それから矢崎さんが、本当に行政に対しての不満も持ちました。不透明な部分もありました。とおっしゃっていましたが、私は冒頭でご紹介いただきましたように、女性議員をふやす会をやっています。女性議員をふやすということは、女性議員をふやすことだけが私にとっての目的ではありません。

まずは当時121あった長野県の各市町村に、女性議員を誕生させよう、もちろんそれが大きな目標の一つです。今言われている男女共同参画、これはあらゆる分野に平等に男女が参画することです。一番手取り早く、政治のところに、政策決定の場に女が入れば、その地域の政治が変わるだろう。県が変わるだろう、国が変わるだろうという期待を持って、まずは女性議員を出そうというふうに取り組んできたわけです。会場にもわが会員もいらっしゃいます。

こうした女性たちがあらゆる分野で活動していく。岩田さんの件もありました、矢崎さんの件もありました、そうしたときに、やはり政治をうまく使う。あるいは自分の代表を政策決定の場に押し出して、それを利用していくということも21世紀を生きる私どもにとっては大きなテーマです。

最後に私からご報告申し上げたいと思っています。ご存知と思いますが、長野県では雇用促進に

関して、産業の創出、あるいは雇用の促進ということで、いろいろな取り組みをしています。従いまして新しく事業を起こす人、新しく町おこしをする人、いろいろな分野に一步踏み出そうという人のためには、学習の場を用意してあると同時に経済的にも支援しています。たくさんの予算が計上されています。従いましてぜひとも、そういう部分にも皆さんが関心を持って、「こういうことをやるときに市町村からの補助がもらえるのか」「県からはどうなのか」「今県でやっていることはどういうことなんだろう」、たくさん支援策が行われています。地方事務所などを通して、各市町村あるいは商工会議所に配布されています。そういうものを使って、そういうものを利用して、自分たちにとって、住みやすい、そして取り組みやすい、そういうものを利用してくださる努力も必要です。あえてこの席をお借りして、申し上げておきます。

今井／それではここで少しお休みを取りたいと思います。お休みのあとは、パネラーさんの間で話をしていただき、その後、皆さんからご質問ご意見を伺いますので、どうぞご用意いただいて、またこのお席へお戻りいただきたいと思います。

(休憩)

自由討論 ～採算、後継者など～

今井／これから、少しの間、パネラーさんの間でお話し合いをいただきます。どなたからでも結構ですし、どなたへでも結構です。何か質問などお話がありましたらお願いいたします。

本川／すいません。岩田さんですが、本当にすごいと思います。私だったらへこたれると思います。よくここまでがんばってこられたと感動しています。やはり子どもを育てながら、そういう仕事をやるということは大変だと思います。結構もうかりますか。

岩田／私のところも現在パート、社員を含め40人の従業員がおります。年商は2億を超えました。数字的にすごいと思われませんが、従業員が40人も抱えていたら、もっと年商がなければいけません。ざっと考えても人件費です。先ほどもおっしゃっていましたが、やはり農業なので、変な言葉で申し訳ないのですが、ぼろもうけはないと思っています。除草剤をまかずに一生懸命草引きをするには、絶対人手が必要です。私のところもジャムは本当に手作りです。お母さんが作るような、そんなものを、添加物の一切ないものとブルーベリージャムを作っています。1回5キロ炊けるお鍋で、上がってくる本数が18本です。それを繰り返し、一日に何回できるか。それでも全国の高島屋さんや一般の方からご注文を頂くので、本川さんと同じように、ストックがなく作った分が出て行きます。

そのフレッシュさ、ビン詰めというのは普通は保存食ですが、それでも長く置いておくよりも、やはり炊きたてがおいしい。保存料が入っていない分、やはりフレッシュで食べていただきたいという気持ちです。

あの味があります。粒の残り感、つや、香り、それと色。新鮮なそういうものを知ってもら。男性もいっちゃうので敢えて言わせて頂きますが、ジャムに加水されているということをご存知ない方がほとんどです。大手メーカーで作る、アヲハタさんとか、大きい声ではいえませんが、必ず、加水、水を加えています。私たちもジャムの講習会に行きますと、水を加えるところから始まります。水とお砂糖、だから色が薄まるから着色料、香りが薄まるから香料、固まらないからペク

チン、増粘剤です。固めるものを入れます。それで仕上がるのは、大手メーカー品。ですから色を見ると透き通っているのは、加水されているからです。安くて当たり前です。そういうものを作らず、果物にお砂糖を加えて炊き上げていくからどうしても高くなる。

でもおかげさまである人が言うてくださったんです。「日本一のおいしいジャムがあるよ」と言うてうちのジャムを誰かが、私の知らない人が、知らない人に届けられました。その人から「日本一おいしいと思いました」と手紙を頂いたことがあります。

ですから、私たちスタッフ、口うるさいジャムおばさんがいますが、「日本一のジャムを作っているんだ」ということを誇りにしてそれだけの仕事をしてください。だから許されない。「こんなことでまあいい」ということは、許されない。絶対この色、絶対この味。ですから私たちはジャムの工場で作られたものを、一日たったものを全然違う事務所の者が、必ず味見、チェックします。甘さと酸っぱさなんていうものは、たぶん同じと思いますが、元の原料が一定していないわけです。甘かったり、酸っぱかったり、これは水臭かったり。それでいて商品として、同じものを作っていくのは、簡単にレシピで、「はい、何キロに何グラム入れて出来上がり」というものではありません。その辺を微妙に炊き込んでいく部分というのが非常に難しい。でもそれを成し遂げている、それを誇りにできる、そういうスタッフであり、それがひいては紀伊國屋の誇りになるというふうな、うちのジャムはそれだけの誇りを持って出せる商品です。

だから「しんどいです」「難しいです」という声が現場から出てきます。それをやっているからこそ、誇れるでしょうと話をしています。ですから余り儲からない。

同じです。やはり年がら年中休みがない。お招きいただき、こういうところに来て、今日で3日間。そうすると紀伊國屋で常に何が起きているかわからない。常にそう思っています。週に1回の休みもない。いつか週に1回ゆっくり休みの取れる暮らしをしたいというのが、私の今のさやかな夢です。でも結局何もしなくてもよいといわれると急に呆けるのではという不安もあります。今はそんな状況です。

年商それだけ、買ってくださる方があって、それだけ売れていることに対してはありがたいし、誇らしく思っています。

本川／ありがとうございました。私は売り上げ、負けました。これからもがんばります。本当にお話が合う気がします。本当にやはり人件費が一番かかりますね。

ありがとうございました。

矢崎／私も岩田さんにちょっと。

お子さんは、おいくつですか。

岩田／もう上の子が30歳です。

矢崎／いっしょにやっというらっしゃいますか？

岩田／はい。時間があったら、そのことを話したいと思っていました。小さい子どもがどういうふうに私の後姿を見てきたかということをお話したいと思っていました。

矢崎／はい。素晴らしいことと思います。商店街も後継者がいません。後継者がいないとがんばれないのです。中央通りのことしかいえませんが、後継者がいるお家は数えるほどです。後継者というか小さいお子さんがいて、まだ子どもなので後継者になるかどうかわかりませんが。現在の店主はだいたい60代、70代ぐらいがほとんどです。その方たちのお子さん、40代、50代の方々はどこ

かお勤めか何か、とにかくいらっしゃらない。ということは、中央通りで細々とやっているお店もあと10年くらいすると、後継者がいないために、ますますシャッターが下りると思います。そういう方たちに代わって、今中央通りも新しい商業者を迎えたいという気持ちですごくあります。だから今お聞きして、後継者がいらして、いいなと思います。私にも、実は娘も息子もいますが、継いでくれません。

今井／岩田さんの息子さんは、Iターンされたと伺っておりますが。

岩田／良いですか、そのことについて話します。ちょうどそういうふうに親子3人肩寄せ合って暮らしてきたので、子どもの人生を考えたとき、大学生になれば手元から離れたかったのです。私以外の大人、周囲の方々がどんなふうに語られ、どんな仕事をし、どんな風に生きていらっしゃるのか、こんなふうに抱き合いながら一生暮らすことは子どもにとって悲劇。だからとりあえず大学はよそに出なさいと、小さいときから言っていました。

上の女の子が大阪、下の男の子が東京に出ました。それで先ほどお話したとおり、一人暮らしになったとき、放火事件があって家を全焼してしまいました。

その当時、私は子どもたちが後を継いでいくれるとは全然思っていませんでした。子どもが一番、大学時代に何かに出会って、自分の一番やりたいこと、自分がやって幸せだと思うことに出会ってほしいと思っていました。

その頃はぼちぼちレストランのようなかたちができ、ジャムが売れ始めた。小さな私のやっている細々とやっている農業というのは、誰かが「こんなことってすてきね」とこんなことを夢に思っていて引き継いでくれる人がいれば、ある意味後継者であるし、自分の子どもにだけ後継するという狭い考えだけでなく、誰かが夢を引き継いでくれるのが、後継者とすでに思っていました。

娘をはじめは何かを志した時がありましたが、なかなか社会はうまくいかず手伝いたいと帰ってきました。息子は特に東京に行って、「絶対帰らない。」とはっきり宣言していて、7年間も東京にいました。でもやはり帰ってきて、「一緒にやりたい。」と話がありました。そのとき私は、すでにもう20人くらい雇っていて、経営的なことで手伝いたいということだったら、私は男の子にこの程度の経営を手伝ってもらいたくて育てたわけではないと思いました。本当はそうではなかったのですが。

親子の関係というのは、「近目（ちかめ）」というか「近眼」というか、こんなふうに見ていると、全体が見えないというか、特に子どもから親を見たときに「なんでこんなうとうしいことをしているのかな。」という、ちょうど中学高校の時にはえらく不満ばかりの時代がありました。親のやっていることが、近いから全体が見えない。

でも息子は東京に行って、友達が家に来たとき「素敵だね。」と息子がいわれ、「へえ、素敵なことをしているのかな。」と初めてそういう目で、農業ということも含めて見直し始めたようです。建物とかではなくて、そういうふうに「農業は、東京で素敵なことといわれることなんだ。」と思い始めたと思います。

そして、あるとき夏休み、夏が一番忙しいので手伝いに来たときに息子が、私がこんな小さな苗木を植えたブルーベリーがこんなに大きくなって、実をたわわにつけている。そこにたくさんの方が訪れて、目を輝かせてそのブルーベリーを摘まれる。そして汗をかかれて、「お疲れ様ですね。」といったら、「いや、良い汗をかかせてもらいました。」とそんな言葉をかけてもらっている、お母さんは、こんなことをしていたんですね。僕も一から苗を植えて、僕が育てる、僕が植えたブルーベリーに、またたくさんの方が訪れて本当に楽しい、こんなにうれしかった、この汗は良い汗ですよ。そんな言葉が交わせられるような、そんなことのために「僕はやらせてほしい。」という言葉が出たときに、じゃ新たに自分が植える農場をそれを任せてやれるのならやってみなさいと、今、

後継者として息子が1000本の苗木を植えました。

うちの場所よりも1時間ほど山奥に行ったところですが、一つ一つの穴を掘り、私が見たところ、彼は土にひざまづいて、小さなポットから根を出して、根に触って、根を触る瞬間は今しかない。だから根に「大きく育ってくれよ。」と声をかけながら、植えていけることに自分が関わること、それから育っていくことに多くの人が集ってくださること、そのことに関わることがうれしいと。本当に1本ずつ、土にひざまづきながら植える息子の姿を見たときに、これからの時代、農業もまんざらでもないなと思いました。これからの時代の若者たちも何かやってくれるのではないかと思います。

もう少し時間があれば、もう少し話させていただきたいのですが、今、そういう意味で20代の若者たちが、15名ほどうちで働いています。天然酵母パンとご紹介いただきましたが、早いときは朝4時入りです。普通で6時には入ります。6時に入るとか4時に入るとか、その約1時間ほど前には彼らは起きて来るわけです。冬の寒い間、暗い、寒い、眠い、その中を目をこすりながら起きてきて、パンをこね始める。そういうことができる若者たちがいるということは、この人たちがそこを超えればきっとこれからその子たちの前にある試練を超えていけるだろうと、そういう目で私は彼たちを見ています。

群馬大学を出て群馬銀行に行ってシステムエンジニアだった人が、一冊の私の本を見て「ぼくはこれじゃない。農業を選びたい。」と、うちに働きに来てくれる人がいます。「農業をしたいです。僕は何も知りません。」と。多分たくさんお給料をもらっていたと思います。「僕はまだ農業のことは何も知らないんで、お給料は要りません。」というところから入った子が、ある日夕方、私が用事を終えて帰ってきて、うちの農場の近くに車を止めて降りたら、薄暗いところで安い合羽を着て、雨のそば降る中、草引きをしているのです。私がそれを見ると、彼は計算外です。自分の言ったことを、その通りのことをするというのは、本当に感動します。そういうふうに生きられる子は、農業の意味を早く受け取ります。そして生きているという意味を。そして「食べる」ということがいかに命の近くにある大切なものかを、彼はものすごく早く受け取っています。

天然酵母のパン工房に勤める子達は、明るくて元気です。6時頃から来ていても。それこそさっき「若者たちから挨拶の言葉がなかなか出ないね。」と教授の方たちと話をしたが、ものすごく元気に「おはようございます」がいえる人たちです。

そういう人たちがずっとうちで働いてくれるとは思っていません。いつか独立していくだろう。彼らの人生を力強く歩んでくれるだろうとそういうふうに思うと、私は今儲からなくても、人件費をたくさん払っていても、非常に今ここにこういう状況があることをうれしく思います。なぜなら一方では60歳の人でも雇用しています。そういう人たちに「おはようございます。」こういう人たちが「今日はおいしいお漬物を作ってきたよ。」と渡してくれる。今は家庭の中になくなった3世代の形をこの紀伊國屋の中が作れているのではないかとそんなふうに思っていることがとってもうれしいです。

質疑応答

今井／では、パネラーの方の話をひとまず終わりにします。

皆さんからご質問ご意見を、どうぞ。いかがでしょうか。

会場より（青木）／下諏訪町から来ました青木利子と申します。樽川さんと同じ、地元ということです。

私は今、三つのわらじをはいています。一つは主婦。一つは夫の会社が倒産しました関係で、夫

が修理工場の会社を興しました。そこで一応経営をしながら事務をしています。もう一つは、樽川さんの勉強会に参加して、今、下諏訪町の議員として働いています。今朝も午前中、夫の所で仕事をしまして、今すっ飛んできました。そしてこれが終わりましたらまた会社に行きます。毎日そんな生活をしています。

今日はいろんな意味で、行政に対するご意見も大変興味がありましたし、これから夫を支えながら企業を支えていくのにも大変良い、参考になるご意見を頂いたと思っております。

議員の関係で農業委員の方から「農業新聞を取る人が非常に少ないので、ぜひ取ってほしい」ということで、先日農業新聞を読んでいましたら、岩田さんの記事が連載されていました。大変興味深いなと思っていたところなので、今日岩田さんにお会いするのを楽しみにしていました。

それで農業を選んだということに、つまり、一主婦が農業を選んだことに大変興味を持ちまして、農業は即収入にはなりません。子どもたちを明日から食べさせなければならないのに、収入が1年先とか、2年先になる農業を選んだのはたいへん勇気がいったと思います。先ほどの内容でわかりましたが、もうちょっとその辺を、パートに出るのではなく、農業を選んだというところをもう少し聞きたいと思うのが一つです。

岩田／私は、生き方として、イージーゴーイングではないものと考えました。イージーではないものというところから、自分の中で帰ってくるものの大きさがあるのではないかと思います。今のご質問は、具体的に収入のない間は、どうしていたかと受け止めてよいですか。

会場より（青木）／はい。結構です。

岩田／嫁いでいた先のことですが、京都の金閣寺のすぐ北にあります35000坪の敷地をもつ大きな呉服屋さんに嫁ぎました。十数年間嫁として主婦をしていました。お着物を着てベンツに乗ってホテルに行ったら、ドアを開けてくださるという生活をしていました。

離婚というとき、私は一切弁護士を立てませんで、そういう大きなところに嫁いだのではなく、一人の男性と結婚したと思っていました。それでだめになったからといって、弁護士を立ててお金をブン捕るというようなところには立ちたくないと思いました。でも「子どもはお前に。」とはじめから言われました。キャリアのない私に、それ相当の彼の持ってる、例えば100万円か1000万円か、彼が納得する分のお金をもらったらそれを足がかりにしていこうと思いました。もちろん、もらったらではなく、一緒に暮らした分として、何か自分の分としてもらえる、手にするお金があったらそこから生きていこうと思いました。

その範囲の中で土地を取得し、家建てて、それで数年間食べていけるという部分を確保しながら、事細かに言えば養育費ももらっていました。そういう範囲の中でやりながら、だから甘えて何もしないのではなく、それはそれとして自分で自立して、自分でちゃんとしたお金を稼ぐということに立って生きていきたかったので、まぁ、ある種のフォローがあったことは事実です。

それでよろしいですか。



会場より（青木）／はい。ありがとうございました。

あともう一つあります。私は今、議員として行政にかかわっていますが、議員の中でも、ある課に行って「このことはどうですか。」という「このことは課が違います。うちの課ではない。」と、他の課に行くと「いいえ、うちではありません。」結局どの課にもまたがる問題であるというとき、そこを乗り越えられる強さが必要だな、もっと突っ込んでいく必要があると今日の話の中で非常に参考になりました。ありがとうございました。以上です。

今井／他にございますでしょうか。いかがでしょう。

皆さんに考えていただいている間に、本川さんに伺いますが、高齢者の生きがい対策を目的としながら、計画栽培などをしておられるようですが、その辺のところをお話いただけたらと思います。

本川／私たちはどうしても原材料が必要です。「かぶら」ならかぶら何トンと、年間に3トンか4トン漬けることになります。それをするには「誰でも良いから持ってきてください。」ではなく、高齢者の方に元気になっていただこうということで「どれだけでも良いから作ってきて持ってきてください。」という感じで始めました。

そうしたら、だんだんいろいろなものが出てきて、「なんばん」とか、「ふき」とか、「ふきのとう」とか。そういう高齢者の方が楽に仕事ができるようなものを取っていただき、私たちはお金を出して買うことにしています。それで種代は会社のほうで半分出します。「何トンあなたはください。何百キロください。残りは青空市場で売ってください。」ということにしています。そうすると高齢者も喜んで作ってくれます。

私どもがたくさん物がほしいときは、やまぶきの場合は、「やまぶき取りツアー」を組んで山へ行きます。その山に行ったときは、その日だけは現金で買います。現金で買って、高齢者に楽しみを持っていただいて、「あそこに行くんだ、買ってもらえるんだ。では、いかなければ。」という楽しみを持っていただいて、今までやっていただいています。

それから「なんばん」などは枝つきできますので、そういう時も高齢者、シルバーの方をお願いして取っています。これからはまた、なんばん取りということですが、皆さん「時間給はたくさんいらないから、使ってください。」とおっしゃいます。私は「そんなわけにはいかない。」と言っています。みんな喜んで来ていただいています。高齢者の方も「ゲートボールで忙しいけど、ちょっと休んでお前のところに行くわ。」といって私たちのところに来てくれます。

90の方でも「なんばん」なんか2000本作ります。うちのほうは、サルが出ます。とうもろこしも契約栽培ですがサルが食べてしまいます。なんばんなら食べないのでということで、90歳のおじいさんが2000本も作ります。

本当に元気が出ます。私たちは老人の方にも元気を出してもらっていると思います。

今井／ありがとうございました。

私のところは岡谷ですが、ハクビシンというのが出て、家庭菜園のとうもろこしがすっかりやられました。少し山のほうでは、タヌキが出てやられたそうです。

みなさんいかがですか。他に何かご意見かご質問かございませんか。

樽川／県外のこんなすばらしい方を迎えてのよい機会です、長野県の名誉にかけて。

学長／では、長野県の名誉にかけて。（笑）

本当にすばらしいお話を聞かせていただきました。

どのお話も『街おこし、村おこし、自分おこし』ということで女性起業家の皆さんががんばって

いらっしゃるお話で、感動的でした。松本大学の「人づくり」、つまり、教育のいろんな問題と結びつくお話をたくさんお聞きできたと思って、たいへんありがたかったです。これによってよかったと思っています。

このオープンカレッジというのは、松本大学に地域総合研究センターというのがございまして、今井さん、「今井さん」なんていうと失礼かもしれませんが、僕も「先生」と呼ばれるのはいやなので「さん」にします。今井さんもその地域総合研究センターの研究員です。地域総合研究センターで、地域づくりの問題をテーマにして、ずっとシリーズとして継続的にやっておられます。その中で、各地で女性の方でがんばって、街おこし、村おこし、自分おこしをやっていらっしゃる方が、あちこちにいらっしゃる。だからこれは、ただ点にしておくのがとてももったいないということになりまして、それなら「地域総合センター」で、そういう方たちをお呼びして、おやりになっていることをご紹介していただくということになりました。

これを契機として、さらに広められる足がかりにできれば申し分ないと考えました。最初はこの名前ではなく「女性サミット」なんて凄く物々しい名前でやろうという案だったんですが、「サミット」っていやな言葉だということで、こういう名前になりました。

お話をお伺いしていて、本川さんと岩田さんは初めてお会いになったんですね。だけど、お話になるとお互いに凄く相通じるところをお持ちで、これから何かあれば、一緒にやっていきたいと思います。

本川／本当にそうです。

学長／でしょう。だから、お二人だけのためにもこれをやってよかったと思っているわけです。

これは「おかみさんの会」というのを、矢崎さんがやっていらっしゃいますが、先ほどからお話を聞くといろんな所にあると聞いています。ありますね。松本にもあります。「おかみさんの会」のひとつのネットワークもあるかもしれませんが、それにも加わって、がんばっている女性の皆さんが、こういうものを一つのきっかけにぜひ点を線にする、線を面にする、そういうネットワーク作りをぜひやっていただければ、やってよかったという実感がさらに強まると思われます。

これは質問ではありませんが、ぜひ、そういう方向で進めていただければありがたいと思います。決意表明などがございましたら一つお願いします。(笑)

今井／おかみさん会の方も、「わたしのところは…」ということでもよいので、ご意見・ご様子をお知らせいただければ良いかと思います。いかがでしょう。

矢崎さんのお話で「松本のおかみさん会は非常に盛んにされている。」ということでした。その状況をお話いただいても結構ではないかと思います。あるいは立ち上がったときのきっかけとか様子とか。

会場から(村田)／すいません。よろしいですか。

樽川／そういうときは遠慮しないで。(笑)

会場から(村田)／私は松本駅前通り商店街の振興組合女性部の村田と申します。

今日は皆さんのお話をお聞きし、感動と勉強させていただきました。本当にありがとうございました。

私はおかみさん会と称して、商店街の振興に足を踏み込んだのは、今から8年ほど前です。私はずっと駅前で商売しています。一歩外に出て、活動するきっかけを作っていたのは、県の商

店街の女性商業者のおかみさん交流会というのがありまして、きっかけはどうも全国おかみさん会の富永さんであったと思っています。県の振興会でも主催してやっていただいたのが8年ほど前でした。

女性リーダー育成会というのがありまして、勉強会で私の場合は2年間そこで勉強しました。そして、私も店を一步出て、自分のお店の勉強、地域の勉強をしたいとだんだん強く思うようになり、あちこち視察をしたりしました。

私の場合を簡単に言いますと、まず最初に駅前通りを女性の視点で何かできないかということで、組合イベントで花市を始めました。ところが夏の炎天下ですぐにだめになってしまう。男性だったら、もうここでうやむやになってしまうところでしょうが、「次に何をしようか。」とすぐに次の発想に移りました。

私たちの駅前には、農家から嫁にきた人が5人ほどいました。自分の地域に対する思い入れ、野菜に対する思い入れがありまして、野菜市をしようということになりました。野菜の香り、懐かしい香り、私たちはそういうものを求めていました。

駅前通りに野菜市を開こうということになり、組合のイベントとして毎月第2土曜日にずっと続いています。この間もやりましたが、今年8年目になります。

最初の頃は、私たちだけではできないので農村女性協議会と組んで、地域の農村の女性と一緒に野菜市をやって、わいわいにぎやかやっているところ「何をだろう？」と人が集まるわけです。

お互いに今では飲食店とかいرونなところで野菜市を通して米を注文するようになったとか、野菜を注文するようになったとか、野菜市により消費者と生産者を直接結ぶきっかけを作ることができたのではないかと思います。

商売においても、私の家でもパンを作っていて、農家のほうの生産者、地元の生産者、顔の見える卵、野菜、すべてのものを地元のものを使って、安心安全ということで、「おいしい」といわれると、そこから発芽玄米を入れたものを作ってみたり、いろんな商品開発、古代米とか、いろんなものを農家から仕入れて作るというようなことをしています。

さらに、中学生の体験販売を実施しています。これも今から5、6年前です。中学生の5日制に伴い体験学習を始めたという情報をいち早くキャッチして、どこかが始める前に早く始めようと、野菜市に中学生も参加して一緒に販売する体験学習を取り入れました。

山辺中学校だったのですが、そこが今度ドリーム大学に発展しました。「これからは地域と一緒に学校もいろんな地域の人たちを先生に迎えて生徒と一緒に勉強したらどうか。」と先生と話合って、ドリーム大学のきっかけ作りが実は私たちのグループから始まったと自負しております。

松本駅前通り商店街では、やはり松本全体が元気にならないと商店街も元気にならないのではないかとということで「松本おかみさん会」を市長にお願いして作っていただきました。それが今いろいろと活躍しておりますが、その中の一人上土通り商店街で、今、隣に来ていますが、とてもとてもがんばっています。一言どうぞ。

会場から／私は松本の上土商店街の女性部で、今なんとか上土商店街を、岡谷市の中央通りのおかみさん会と同じことです。本当に昔は非常に人通りが多く、田舎から大勢の方が上土商店街に出て来られるという感じでしたが、今は逆になってしまいました。松本市の中央商店街が周辺の大手の大型店によって、客の流れをストップされているような気がしてなりません。

整備された街ではなくて、本当に人が触れ合える、安心してあそこの街に買い物に行きたい、楽しみにいきたいという街を作りたいと思ひまして、女性の感性を生かした街。そんなことで今年の秋頃からいろいろ活動を始めました。

まずとにかくこれから高齢者が多くなりますので、高齢者に元気になって活躍していただくため

に、今私たちの街で、童謡なら皆さんが知っているということで、高齢者を集めまして「童謡を楽しむ会」というのを月に1回始めました。そして私たちの街にその童謡を楽しむために足を運んで下さる、そして私たちの街へ来ていただくことを目的に、そこで触れ合える。そんな高齢者の居場所作りの一つとして始めました。

それからまた、街に買い物に来ていただいても、寂しい街ではいけない。そんなことでお花も植えました。それからベンチもほしいということで、なんとか女性の力でということで、資金調達の方法も考え、実行しています。

生坂村と姉妹提携をしています。そこから新鮮な野菜を持ってきていただいて、「ふれあい新鮮市」というのがあります。それと同時に私たちの街の女性がいろいろなところから仕入れた物を売る「元気市」というのを始めて、その売り上げでベンチを買ったりしています。

一つ岡谷市中央通りのおかみさん会の矢崎さんや、岩田さんもおっしゃっていました。今、私は時間がほしいなと思います。自分の仕事をしながら街のことをやっていると、朝から夜まで寝る時間を割くことが多い状況です。ご商売のほうはどんなふうにしていらっしゃるのかと思います。私もどうしても、どちらかをとると、だんだん両方が大変になってきます。どういうふうにご商売をしていらっしゃるのか、そこをお聞きしたいと思います。

矢崎／はい。今は商売は残念ながら余り忙しくないんで、私の店は、サンリオショップ、キティちゃんのお店です。他にもしゃれた雑貨やキッチン関係の商品を売っています。昔はクリスマスはアルバイト5人くらい使っても足りなくて。今は伝説になってしまいましたが、カウンターで包むことができなくて、ずらっとお客様が並ぶので、床で包んだり、ご飯ももちろん食べられませんでした。それくらい忙しいときがありました。

今はクリスマスになってもゆっくりご飯が食べられます。アルバイトも雇うお金がありません。だから母と二人で店をやっています。母に「お店に出ているんな人と接していれば、いつまでも若くいられるよ。お母さん若いって言われているよ。」とおだててなんとか、今日も定休日ではないので店をやっています。「お母さん今日ちょっと一日いないけれど」とお願いしてきました。

幸いなことに、本当に幸いなことですが、おかみさん会を立ち上げたその年に、主人が単身赴任でいなくなったのです(笑)。「幸い」なんて言っただけいけない本当は寂しいんですが、ちょうど1月に立ち上げて、その年の5月に、蓼科のゴルフ場勤務なんです。軽井沢にもゴルフ場を出すことになって、半年でよいから急遽手伝ってほしいと、ゴルフ場は冬場はしませんから5月から半年だけということでした。子どもも二人とも大学でいなかったので、主人と2人暮しでしたが、主人もいなくなって。本当は私もついていってあげたいのはやまやまだったのですが、私は店もあるし、おかみさん会も立ち上げたし、いっしょに軽井沢には行けないと言いました。

今まで何もできなかった主人。お湯を沸かすくらいしかできなかったんです、本当に。最初は手間取っていましたが、だんだんやればできるということがわかって、今はいろいろお弁当も売っているし、洗濯機を使えば指1本あればできます、洗濯が。アイロンかけは、私よりも上手です。男性もそういうことが少しできたほうがよいと思います。

絶対に自分が必ず奥さんよりも先に死ぬとは限らないし、何があるかわからないから。

半年といったけれど結局、3年間単身赴任になって月に2度くらいしか帰って来ないのです。だから、本当におかみさん会に打ち込めたんです。

他にもいろいろ出ることがあったり、イベントやれば、それなりに仕事があったりしましたが、ジャズのときは本当に大変でした。何もわからなくて簡単に受けてしまいましたが大変なことでした。チケット作る、ポスター作る、それを売り歩く、会場手配まで、来る方たちとの打ち合わせだったり、本当に胃が痛くなるというか、白髪が増えるというか、もうとにかく本当に大変な思いをしました。が、主人がいないおかげで、家に帰ればご飯ができていたり、朝起きれば母がご飯を作

ってくれたり、夜はくたくたになっても寝るだけとか、家のことをほとんどしませんでした。おかげさまで主人のおかげで、あの時は助かりました。

今年また配属替えになり、戻ってまいりました(笑)。今は完全に戻ってなくて、週のうち半分こっちで、半分为軽井沢。今日は軽井沢に行きました。そういう感じで主人がいない間は、娘のウエイトが高くて父と母と一緒にいたりするので、やりたいことをやらせてもらっています。おかげさまで父も母も元気でいてくれるのでできます。それは本当に感謝しています。父や母が元気でいてくれなければ、やはりいろんなことができません。父も母も1年でも長く元気でいてくれて、主人がなるべく軽井沢で、元気でいてくれると良いと思います。

家族って大事です。何かをするのでも一人では何もできない。皆さん周りの環境が整ったり、理解がないとできません。おかみさん会も会員40名いますけど、中にはご主人様とか家族が理解してくれない方もいます。活動するのに影で「かかわるんじゃないぞ。」といわれている方も多分いると思います。そういう方も含めて40名で、40人全員が私と同じ気持ちでやってくれたら、もっと凄いことができるのですが残念ながらそうではない方もいます。

それでも4年間やってきていると、最初は「何を一人で張り切っているのだろう。」と思われていたのが、「この人に任せておけば、なんとかなるのでは」と思っていただけの方が増えてきました。だんだん力を貸してくれたりする方も増えてきたのは、すごい喜びです。

これからも大したことはできませんが、何とかやっていきます。松本の方々も私たちよりもすごいので、がんばってください。

今井／それでは本川さん、何か最後に補足をされますか。

本川／はい。今度私たちが全国で30団体の中から選ばれて、お手本ということになりました。岐阜県では私たちだけですが、そういうことになると、また気を使います。これだけ全国で認めていただいたのががんばりましょうといっています。農政局からとかいろいろきます。「今度大臣さんがお見えになるかもしれませんよ。」といわれましたので、それでしたら来ていただけるのでしたら、「総理大臣をお願いします。」といって笑いました。

今度、9月11日に東京で行きます。そこでまたお話をします。私たちもここまでになったのですから、元気いっぱい女性の力でがんばっていききたいと思います。ありがとうございます。

今井／では岩田さん。

岩田／私も、前年度の12月31日締め切りで毎日新聞が日本グリーンツーリズム大賞というのを募集していたのに応募しました。わたし一人が応募する内容を書いたのではなく、パンの現場から、レストランの現場から、農場の現場からそれぞれ担当しているものが、都会の人、お客様と交流ができたときにいかにうれしいか、現場から何を伝えたいか、それぞれの現場の人がつづったものを31日の8時までかかって、夜でも飛ばせるので、ぎりぎりに出したものが賞を頂きました。東京で表彰式がありました。

そのときに『農林水産業から日本を元気にする国民会議』というのが6月1日に立ち上がるということで、そのメンバー幹事として、農業の現場の女性の声を上げてほしいといわれて、いったい国民会議とはなんぞやと思って、6月1日に伺いました。

代表幹事の方が宮澤喜一さんと、サンヨー電機の井植さんという会長と岐阜県の全国知事会の会長の梶原さんでした。そのメンバーを見たときに一部上場企業の会社が国民会議のメンバーになって、日本の農林水産業を元気にするとおっしゃっている。これはどういうことかと思って行きました。

これは私の見方が“はす”に見ているのかもしれませんが、一部上場企業というのは、例えばサンヨー電機さんがサンヨーホームズという部門で家を建てたり、ありとあらゆる業種がいろんなところをせめぎあって、今は電気屋さんは電気だけでなく、いろんなことをする。ほかのところもありとあらゆるものがいろんな業種に手を出しているわけです。そうすると、これ以上のビジネスチャンスはないなと思って、上から下を見たら、農業がまだガラガラだったと。

農業がまだ手付かずの状態、いわゆる一部上場企業さんが、カゴメさんとか、それぞれがトマトをされています。が、まだまだ隙間があるということで、これから一部上場企業が本当に農林水産業に入ってきて、これを一つのビジネスにしようという動きだと、先日代表幹事のお言葉を聞きましてそういうことだろうと思いました。

大手企業がやる仕事は、さっきのジャムではないが、水を足して、それでも利益を得る。株式会社ですからたくさんの株を公開してその人たちに配当しようとしたら、かなりの利益率をみないと成り立たっていきません。

私たちがぎりぎりに働いて、これくらい儲かればよいかという仕事とはぜんぜん違うわけです。そういう人がどういう形でこの農業に入ってくるのかを、私たちはしっかり見ていかないといけないと思います。

なぜならば、トヨタの車に1ヶ月乗らなくても、ソニーのテレビを1ヶ月見なくても私たちは人として、人間として生きられます。食べ物が一ヶ月なかったらみんな死ぬわけです。命の一番近いところにある食、農業というものがどういうところが一生懸命やっているのか。農家単位で物を生産しています。私たちはその中でちょっと大きいほうでしょうけれども。そういうところで作っているものは一生懸命、汗をかきながら出荷できるものが多いです。でもこういうところが参入してきて、そういうものを作るのは、利益率からきっちと組み立てられて、そういうところから生産されるものがいったいどういうものか。世にある遺伝子組み換えのような、それに近いようなものももっともっと前に売られる時代が来るのではないだろうか。

一方では、自給率40%という日本が、中国やいろんなところから輸入される食べ物に依存していたら、今はもうアジアの中で「お米は出せない。」という言葉がどんどん出てきています。砂漠化が進んでいますし、温暖化現象が進んでいます。こういう地球上に生きていて、いつもいつも、日本で田んぼが荒らされ、この間も岐阜県に行く機会がありましたが、「過疎になっていく。」と老人が訴えていらっしゃるのです。でも仕事がないと何をやってよいかわからない。でも田んぼを荒らしている。「そこに何か植えたら、買い取ります。」という人が、行政から出ていないのです。一個人が「買ってあげます。」といっても、もっともっと行政がこういう仕事をしないと。今だったらまだ植えたら緑になって、緑のものを生産する土が残っているのに、荒れ放題にしていると、本当に将来どんなものを食べていくのかということをしきりと見ていかなくてははいけないし、その意味で政治というところに私たちが参加して、ちゃんとした命を持って、きちとしてみないと。そしてきちとした発言をし、たまたま私は国民会議で知りましたから、ちょっとでも私が知っていることを皆さんにお伝えしたいし、それをどう受け止めるかは個人の自由でよいと思います。

こういう時代に生きているんだということを、私たち全体がちゃんと見て、ちゃんと発言していくというところに生きていかなければ。本当に食べ物というものが、どんな形のもの、食べ物が手に入らないといって、困る、寂しい状態になるという状況のことを読まなければならない。

だから安閑としてはいられない。だからこそ農業にかかわるものは誠実に、農家の人が誇りを持って生産していかなければいけないのではないか。そういう農業がきちと日本の中に緑を支え、山を、森林を支え、豊かな海までを守っていけるような日本というのを、みんなが意識しなくてははいけないと思います。

私たちは従業員40人くらいですが、うちは山水を使っています。昨日も夕立が来た。夕立になると、水がにごる。いろんなもの、落ち葉とか泥とかが運ばれてくるので、水が止まるのです。「水

が止まりました」と誰かが叫ぶと、掃除をします。若者が走って行って掃除をすると、みずはそういうものかどうかで働く人はみんなよくわかっています。

どんぐりの葉っぱなど広葉樹が多いと葉っぱが落ちて、微生物が分解して川に流れて、プランクトンのえさになり、そのプランクトンは小さな小魚のえさになり、小魚は大きな魚のえさになります。この微生物が広葉樹がないと育っていきません。そういう山の間を走りながら、水の掃除をする若者がいる。そういうところが私は凄く良いと思う。そういう若者が語ってくれると、そういうことがどんどん伝わって行けばここで歯止めができて、もっと大事な、日本が素敵なおとこであり続ける、この思いがつながっていく、そんなものが育っていけばよいと思っています。

ま と め

今井／ありがとうございました。それでは、コメンテーターの樽川さん、総じて、総合的にコメントを頂きたいと思います。

会場より（小池）／時間ないのでどうもすいません。

私は立科町の町会議員、小池美佐江と申します。今日はこのこのパネルディスカッションに参加して立科町に何か持って帰ろうと思ってきました。3人の方、素晴らしい話で感動しています。そして女性の起業家というのは、本当にやる気と元気と人助けだとかつくづく感じました。そして常に感謝。そして常に夢を持っていることが成功の秘訣ではないかと思いました。

ありがとうございました。

今井／ありがとうございました。

樽川／とっても良い激励のこたばをありがとうございました。

学長／お願いがあります。

本当は話を聞けば聞くほど惚れ込みまして、このままのご縁で終わりにしたくないと思っています。申し訳ありませんが、先ほどから皆さんの後継者を作らなければいけないということをお考えですし、私も松本大学は、明日の幸せな地域社会を作ってくれる、明日を託せる後継者を作りたいと思っています。後継者を作るという点では、大学も皆さんもまったく同じです。

私は、本当にこれから何かございましたら、ぜひ松本大学に来て非常勤講師として、授業をしていただければありがたいなと思います。ですから、そういうふうをお願いをしましたときには、今日のこれがご縁であって、運が悪かったとあきらめていただき、お断わりにならないでいただきたい。

ぜひそういうことで松本大学の非常勤講師を今後何かあったら願するということで、お願いします。どうもありがとうございました。

樽川／たいへんありがたい言葉じゃないですか。3人とも、しっかりと重く受け止めてください。

それでは最後に私からでございます。私は戦後日本の政治で一番間違っしたのは農政と思っています。この農業国、農耕民族である日本人が、ずっと古代から米を作って生きてきた。その中のわが日本が米さえ作ってはいけません。逆に作らなければお金を払うよなんて、こんな国家というのは非常に恥ずかしく思っています。そしてもう一度、食の安全という意味からも、日本の農業を考えなければならぬと常々思っています。

今日、岩田さんのほうから、こういう形で私は農業に関わり、本川さんもそうですね。そういうお話を伺ったとき大変心強く感じました。もう一度土のありがたみ、土の恩恵というものをじっくり考えてみたいと、思った今日一日です。3人の話を聞きながら、とにかく真摯に物事に取り組んでいる姿は、今、たまたま学長先生がお話を聞いて感動したように、常に人に感動を与えます。ですから真摯に取り組んで、まじめに取り組めば、必ず人を動かすことができる、それこそがリーダーなんだと思っています。

ともあれそういう意味からすれば、私の立場からいえば、今日の3人は、大学では非常勤講師にとおっしゃいましたが、私の立場から言えばできれば3人を国会に送り出すことができれば、いや本気なんです、日本の政治も変わる、日本も変わるだろうという思いですから、皆様に伝えておきたいと思います。

最後にこんな機会を与えていただきましたので、3人の話にも関連するし、日々の生活にも関連することですが、それぞれが行政と上手に付き合う姿勢は大事だと思います。

例えば松本で市長選があって、新しい市長が誕生しました。これを支持した人、反対した人、嫌いな人、好きな人がいるでしょう。これはどこの世界も選挙があるところは同じです。長野県で見ても、田中知事が誕生してこの知事を支持する人、反対する人それは様々でありましょうけれども、選挙の中で選ばれて菅谷さんが松本市政を4年間任されたことは事実です。また田中知事がその任期4年間あることは事実です。行政の上で最高権力者なんです。そこを反対ばかりしていたのではだめであって、協力できるもの、仲良く付き合える部分は上手に活用しながら、どうしてもだめなときは、その次、そのために4年ごとに選挙があります。ですから選挙に新しい人を立てよう、新しい人を選ぼうというのは、これもまた自由です。

選ばれた以上は、時の権力者です。そういう言葉は好きではないが、執行者を上手に使う、仲良く付き合う。このことも日々を生きるうえで大切であるし、ことに事業をやろうとするものにとっては不可欠だと思います。

それぞれがそれぞれの立場の中で、しっかりと真摯に生きていこうという思いを深くしました。私をはじめ皆さんもそうでしょうが、こんなよい場所を与えてくれて、こんなよい話を聞く機会を与えてくれた、この松本大学の特に学長先生のその思いに本当に深く感謝し、感動し、心からの御礼を申し上げまして、松本大学が地域発展のために益々大きな存在感として私どもに利益をもたらしてくださいよう、心からお願い申し上げます、私の今日の役目を終わりにさせていただきます。

ありがとうございました。

今井／本日は『女性起業家に学ぶ 街おこし・村おこし・自分おこし』ということで、パネルディスカッションを持たせていただきました。ご協力をいただきまして本当にありがとうございました。中野学長が先ほどパネラーの方々に、非常勤講師になってほしいとか、このパネルディスカッションをやってよかったなどおっしゃってくださり、更に女性のパワーに、そして女性の感性に非常に感動されたともお話をなさいました。それから今、コメンテーターの樽川さんからもコメントを頂きました。

これらのご意見をあわせて、本日のパネルディスカッションのまとめをして頂いたと思われますので、これで私の役も去らせて頂きます。

コメンテーターさん、パネラーさん、そしてフロアーの皆さん、ありがとうございました。ご協力を感謝申し上げます。お疲れ様でした。